

086721-000-7

特63-72

八重雲

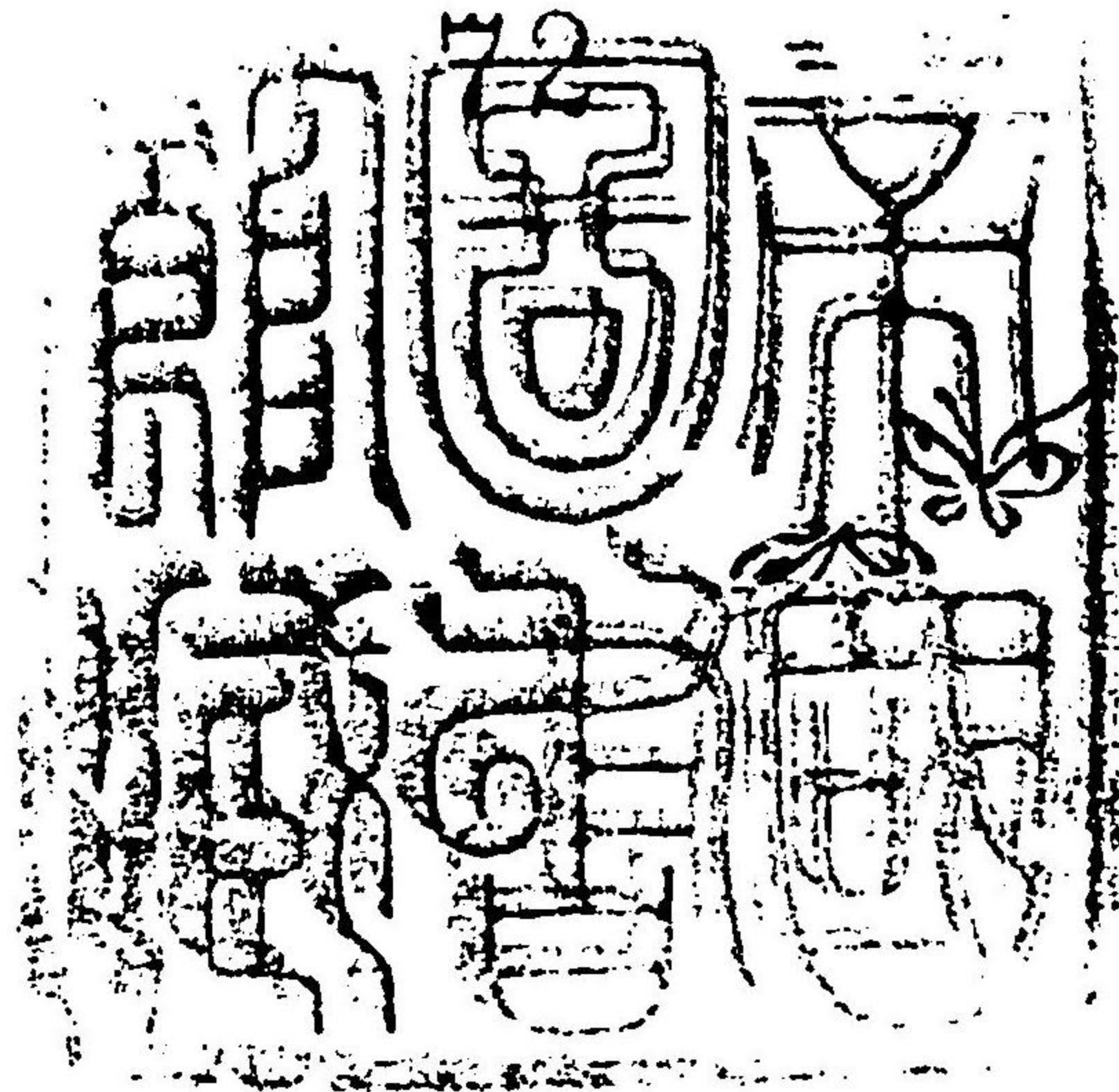
田中 美風/著

M34

DBD-1926



特63





君が代は千代に八千代とうあるら

か初日の丸の旗かざすあり

大君は千代にましませ民は皆あを

くあれとて松竹たつる

田中美風作



若水にむすふ氷をさしのぼる初日
にどきて筆こゝろみむ

梅か香のうつりし袖をかたしきて
こよひ夢路に花をたづねむ

山神のやしろのひさし雨もりて花
ちる袖はぬれにぬれたり

二

たゞぞみてゆかしの梅の花みれば
柴の戸もれて琴の音ぞする

三

籠り居て花をまつまの心をば歌に
よむべく春雨ぞふる

朝霞たあびく頃に立出てかへる軒
端の夕かすみかあ

底淺き寺の古井の水澄みて赤き椿
の花しづむ見ゆ

又も來む事をさだめぬ旅あれば衣
更へらく此處の春を惜しむ

梅柳水をへだて、うちかすむ中こ
く舟やただ春の風

四

處どころ板つくらひし屋根の上の
石の間にさくらちりしく(金澤にて)

五

花一枝かさにかざしてむかつをの
峰のかすみに消ゆる旅人

さしのほる日影をうけて朝風にふ
たひら三片散る櫻がふ

春の夜はおぼろかからにわけゆき
て何處ともなく鶯の啼く
長閑さに庭をめぐりてかへり來し
机のはどり飛ぶこてふ哉
手折來し花をさしたる筆洗のめく
りに蝶の去りあえむとふ

六

波白く三保の松原つくるどころ霞
の奥にあさひこのほる

七

夢に見し梅の林を牛に乗りし童よ
妹によく似たる哉

大比枝に残れる雪をふくみつゝ霞
の底に小さき京見る

老ぬれとますます梅はいさきよし
鐵の枝銀の花

奥津城に残れる雪をうちはらひう
ちはらひつゝ、梅たてまつる
妹と我たもとつらねて若葉つみし
柳のかけは今も長閑あり

八

鶯の聲により來し中垣に隣の少女
恥をふくみてたつ

九

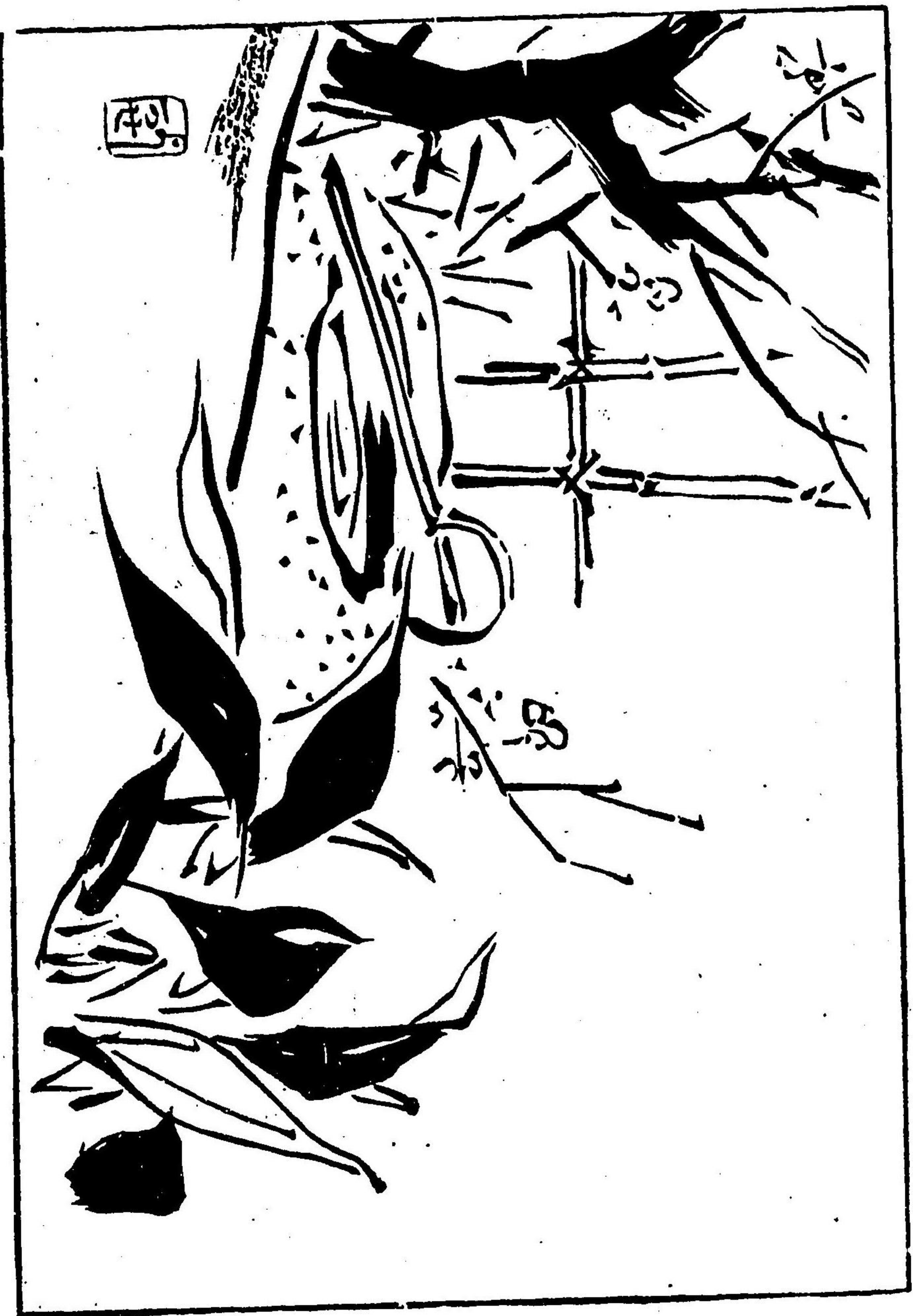
鶯は春の女神のつかはしめか聲も
心も春にうさはじ

春の日をふたふ胡蝶の聲をききぬ
すみれに寝たるたまぐらにして

尋ね來し軒端の名刺小くして今盛
りかり白桃の花

川そひの柳の村はくれそめて僅に
しろく夕煙たつ

庭にいて、残れる花をかそへおれ
は雨にかりつ、春くれむとす



このめつむ宇治の少女子ゆかしく
も戀歌うたふ宇治の少女子

一一

たまはりし白玉椿ちりすきぬされ
とけたかき思はむねに

月花にひく杖とあれ筆とあれ我ま
とちかきいささむら竹

賤の女にうちましらひて長か子の
うたもうたはて早苗とるかあ
かけくろく山田のそほつかつ見え
てのひし早苗に月さしのほる
かやりたく煙の末をかかむれば僅
にほふ三日の夜の月

夕立の雲にのまれし大比枝の山の
いたたき神ありひひく

みそきせし村の小川の麻の葉にあ
はれ螢のあかれゆく見ゆ
蚊柱を吹きくつしゆく夕風にさそ
はれてとふ窓のほたる火

やせむらのおくつきどころ草を繁
み残る螢のたゝひとつとふ

一つ消え二つさえつ、まれに残る

ゆかのぼんぼり新内の奇かし(夏の加茂川

水こひし野路のふせやのせとちか

き古井のほとり紫陽花のさく

一四

森かけにあつさをさけてのる駒に

水かふおたり夏艸の花

踏切の小舎の茅ふき日にやけて隣
の細道ひるかほの咲く

田子の浦ゆふりさけ見れば夕虹の

上にぞひゆる富士の神山

一五

よのつねの戀にふさはぬ色といふ
や姿といふや白百合の花

子に孫に早苗とる田をまかせをき
て思ふことあき翁かひとつや

木犀のかをりに酔て歌あくは戀あ
き恥にまされりとしれ

姫百合はかけにかくれぬ月の神水
にかかひてうかふとせよ

しのひかねそゝろあるきの夏の霄
わかや落るはすき梅の實

ほどゝさすまぢあかしたる東雲に
神かりそめて梅の實落ちぬ

何氣あく今日見し花の夢にいりて
神とありしよ白百合の花

おしろいの水うち捨つる池の邊の
あやめの花はいろあせたりあ
興あしとたれかいふらん夏の色夏
の姿よ日車の花

壹八

蚊やりたく磯のとまやに人はあら
ていつこともあき歎乃の聲

壹九

うた、ねのはたえ冷たき草蒲團若
葉の雨に琴の音そする

若葉かけ歌にまどへる我やそもひ
くは誰か戀琴の音わかし

妹か病とふへく道にしてつとに
とめし此螢籠

妹か學ひのひまにつちかひし庭の
朝かほまた菫かり
うちおろすあみのひさきに驚きて
柳をいつる白鷺ひとつ

底くちし芦間かくれの捨小舟へさ
きのあたり白鷺たてり

大比枝の一本杉を雲越えて黒谷わ
たり夕立すらしも

西山の雲に夕陽の影さして空より
落る紅の雨

浮葉まきは蓮の上こくふきはたに
花の露ちるこの朝はらけ

歌かきて舞の扇を岩はしる瀧に
くれは胸の血ひえぬ

手土産の茄子の初ものそとおきし
乳母か白髪はことしふえたり

朝かほの鉢を洗へる里の子が白地
の浴衣あけの帯あけ

午睡する時の茶屋に風たえて深谷
の底に蟬あきしきる

露白く風まだぬむる此朝げ青き芒
に月落かかる

人の世の運命さための外に我たてり朝日
おろがむ富士のいたゞき
振袖を膝に重ねて朝かほの花をか
ぞふる人美しき
水鳥のたちゆくあどの芦間より月
に掉さす舟出る見ゆ

天の川わたる一夜は短くてつきぬ
思のとしにそふらん(七夕)

隈もあき華表の上の月かげは此み
やしらの神の御靈か
實り田に夕霧ふかくたちこめて風
にみたるる賤かひあうた

飛石の上にこぼるる糸萩の花にし
づけく秋の雨ふる
さびしさに友をしとへはさきりた
つ其柴の戸に菊白く咲
ものけの住むてふ榎枝折れて野
分の風に鳥ひくくどふ



月かけの涼しき庭におりたちて歌
思ふ時笛の音聞こゆ

二七

松黒く砂は白く小夜ふけて月うち
よする磯の満潮

唯一人月の夕に取出て心ゆくまで
振る刀哉

秋たかく馬に肥えたり馬にのりて
秋の詩と繪を探り見むかか

長き夜の寢覺の床に昨夜よみし歌
の下句ありえてかきぬ

朝朗け霧の中行くふあうたの小島
かくれに遠くくある

秋かせにたかひく蟹が夕煙消えゆ
く海のはてに星見ゆ

うちよする波のしぶきは其まゝに
さきりとありて海くれむとす

來む世もしあらは生れむ妹とわれ
此月のもと此海の上

山姫か戀にさくさくある涙もて染みし
紅葉に非せとせんや

あだにおく露さへ隣れうらぶれて
庭に花さく草もあき身は

ささかにの糸の乱れに露おきて我
庭今日もくれて行く哉

さらば君とばかりありし去年の別
れ御墓露けき今日の秋草

小夜更けて月も高瀬の川舟にまだ
ねぬ人の笛の音ぞする

秋の野の名もあき花も最惜しきを
折りて捨てます君何のもだえ

稻妻のはてに島あり其島に我名お
はせて住まは如何あらむ

霧わけて舟よする岩に歌ゆるせ島
の女神ひめがみ花こふ歌を

番兵が劔の尖に月落て狸餌あさる
火薬庫のあたり

三三

何とあく露のゆくへをあがめおれ
は秋の日くれて蟲あき頻る

三三

孟蘭盆の踊の唱歌遠く遠く旅寢の
窓を唯秋の風

唯ありて秋とありけりたあたり
支那の夢見つ恥多き身や

紫の秋の山見る里の子か赤きたす
きに戀あからせや

君か笛の潮來追分秋さびぬ桔梗の
露の今暮るる野に

秋草の花の廣野の夕まぐれ此世あ
やしき水のささやき

三四

まだ残る夜寒の霜に月さえて遠侍
にすひきする也

落ちかゝる月より上に聲のして曉
ちかく千鳥あくかり

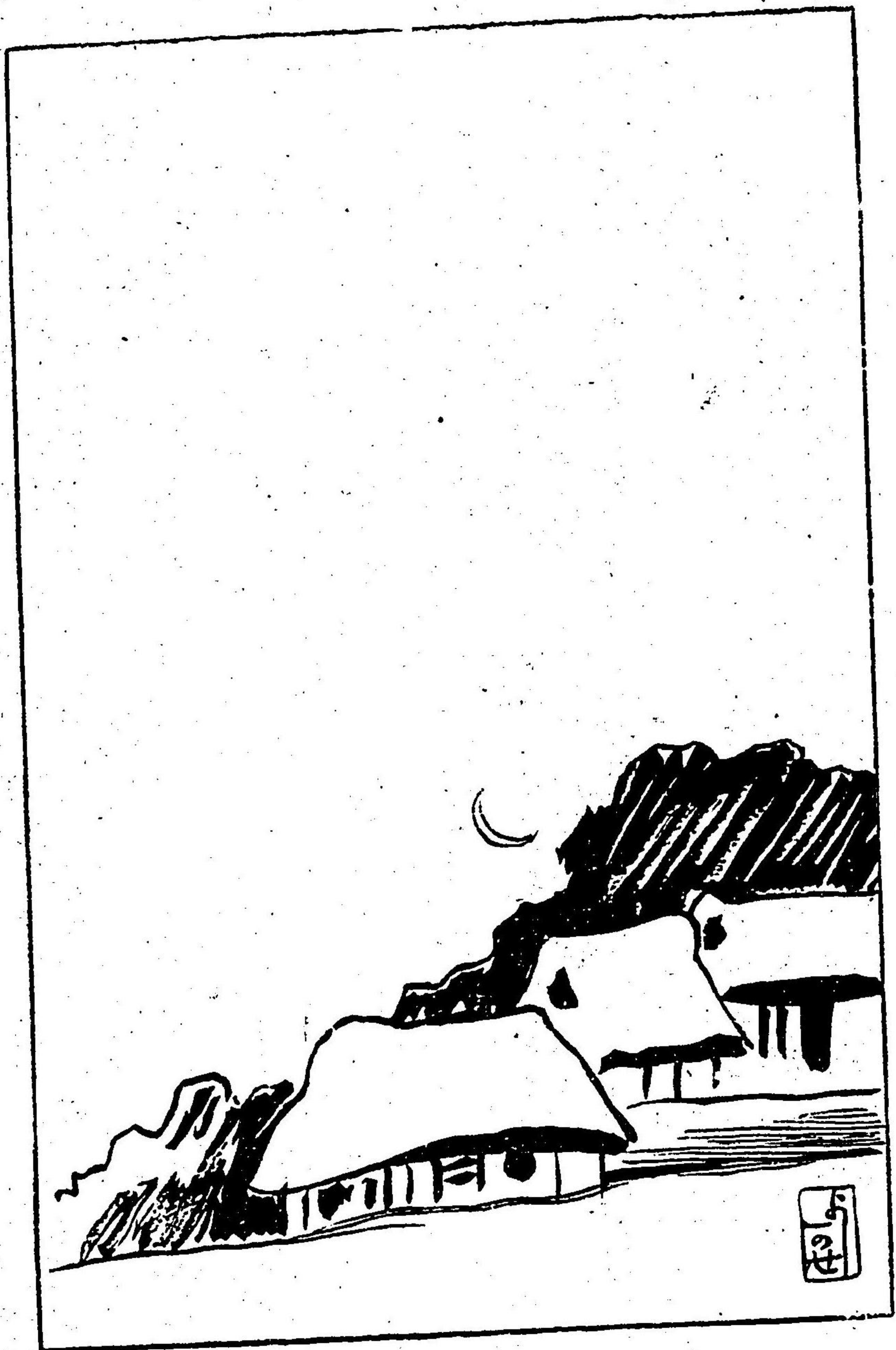
風はふしも乱れて鴨川の岸に更け
ゆくかどづけの聲

三五

うらかれし樹々の梢に月もりて霜
ましるある森の下道

もみちはも掃ひ盡して村時雨今霄
は雪とありぬべき哉

松が根に爪とぐ熊の怒り毛に風寒
く吹荒む哉



柳散る冬の小川の水かれて霜おく
石にさゆる月かけ

寄る波に群れたつ千鳥ひく波のわ
どに餌あさる磯千鳥哉

雪見むと訪ひし我友家に在らむと
ぢし扉に梅の香ぞする

襟垢の月に光りて小按摩が笛の音
細し霜の夜の道

霜白き道に迷ひし犬の子が知らぬ
我身をしたふも隣れ

竹の葉におきては迂る雪をさきて
一夜夢あらし竹の下庵

をのづから落葉に徑の絶えしより
また世に出てぬ翁がひとつ家

逢へばまた昔にかへる君とわか戀
は今日よりあはまさらむ
あき妹か命にかへむよしもがあ今
日より後のしのぶ月日を(戀しき人のみまかりぬ)



夢に見る昔こひしと此頃はまくら
にのみそ我はあれつる
手むくへきぬさは心の形にて真白
に清きものにこそあらめ(神にまふて)
大君をまよりの劔我爲の寶の劔く
もらじとこそ

旅まくらかりぬの窓の雨くらくす
のこの下にいたちあくあり

待ちわびて火桶の灰に君が名を十
度かくまに來ませ我脊子(女の心を)

ゆきし兒よ今は何處にうたふらむ

「みかどのおうまれわとばせし日を

(兒をさきたて、未だ日な
らす天長の佳節にあふ)

よその兒の泣く音に耳をそばたて
、苦笑する我妻憐れ(おなじき頃に)

大君の御姿かざり支那をうちし劔
かざりて歌奉る

君か爲はた世の爲に此劔再ぬかむ
日はいつの日ぞ

繪を賣りて太刀かふ我は愚かりや
世はいたづらにそを嘲りぬ

名をかさぬ三十男父母のつけまし
し名をかのらぬ男

傳へ聞くぬけば血を見る古太刀を
かをいたづらに幾世ひめてむ

ゆきし兒に似たる姿を見てしよ
日毎我ゆく幼稚園のかど

世の中に名もあき賤も筆とりて歌
かく時は神をひまさむ

富士の根の雲わく中に杖たて、小
き我を笑ひつる哉

上矢の鏑ぬきをへ礪波山たかきい
さをを神に禱る君

武士はあさけを捨てて名こそをし
め妻に別れて獨ゆく憐れ(以上二首木曾義仲)

山高く我歌反古をうつめてし其夜
折れたり峰の老松

ふみ反古に狂ふ小犬を膝にして笑
みます君よ歌あからすや

胸はくるしされど意氣あは健かに
我今たてり富士の頂

我歌を石に記して川に投けて波に
あやしきささやさをさく

あつかしき我里川は濁りけり貴き
人の庭にいりてより

富士のねの雲涌く中に朝ひこのか
けみしよりぞ我に望あり
亡き母の夜毎來るてふ嬰兒のあく
聲すあり雨くらき夜は

我筆に戀の女神をがけといふやそ
れよ白百合白玉椿

そは遠き遠き願よゆるし玉へ今は
御玉章みたまに口つけてやまむ

とおもひてとりし繪筆の蛇とあら
ばあらばとこしへ戀の血吸へあ

四八

おもひつゝおもひつゝあはとふこ
とのいたましき哉師のみいたつき

四九

繪筆折りて病める我師の爲あらば
車ひかむもいとふ子あらす

我筆の命毛かけむ繪の御神まもれ

我師の美しき御名(以上三首我丹青の師なる君へ)

琴のうらに人を咒ひの歌かきて壁
にたつれはいとふつときれぬ
十三のいとに悲しきしらへありて
我歌あらず終にわかれし
瀧壺に詩集あげたる少年の白きお
もての笑美しき

五〇

君を見れば悲しがらまし病みますと
唯聞くにさへくやしきものを(病める人へ)
底清き神代のまゝの岩清水歌あく
名あくあは幾代へむ
鬼の如そばたついはは蛇の如まつ
はる樹の根瀧落る處

五一

峰たかき山松か枝に日のさして荷
馬の鈴の音うすれゆく

けがれたる世にはおかじと歌神の

そらにや（清きその子を）清子女のみまかりしに 呑せる清きその子を

我問ひし戀はかたらてほほゑみし

樂師の君の指のほそりよ

あぐさむるすべさへしらを病多き

樂師か調べあまり嚴

繪はがきの帖にはわざといれざり

し御歌とき得ぬ我にしも非を

かおもじの紫にじむ繪はがきやあ

よしもあき人の情けや

繪はかきのたたせる女神君に似たり
りささくとのみの筆の亂れや

八重雲 なほり

五四

明治三十四年十月二十五日印刷
明治三十四年十月二十九日發行

複製
不許

編輯兼
發行者

田中金次郎

下京區大和
大路三條下
三丁目辨才
天町拾六番
地

印刷者

石黒劔次郎

上京區間之町
通二條上ル

印刷所

敬愛社

上京區三條通
鉄屋町東入

京都市三條通
寺町東入

發賣所

福井源次郎

146
646



